

エピソード2 草葉の陰の世界

翌朝のレイの部屋、本日土曜日で学校もお休み。今日は昼までたっぷり寝るぞ――。

「おっつはよおっ―」 人生の終わりを感じさせた悪夢の一夜が明け、朝一番に死人でも目を覚ましそうなでかい声でレイを叩き起こしたのは、その悪夢の根源であるチャコだった。しかも全身でレイの体の上にボディプレスしてくるといふオマケつきで。

「ぐっふ……痛ぁーっ、お、重っ……何すんのよ、いきなり！」レイは一瞬で昨夜の出来事が悪夢などではなく、現実だったのだと文字通り力一杯突きつけられた。

「え？ いつもこうやって起こしてたじゃん……。何怒ってんの？」まん丸でキラキラしたオッドアイがレイの目を不思議そうに覗き込んでいた。

どうやらチャコは生前、普通のネコだった頃と同じノリでレイを起こしたかったらしい。

そう、昔は寝ているレイの上にちょこんと飛び乗り、耳元で「ニャー」と鳴いて毎朝爽やかな目覚めをプレゼントしてくれていたものだ。

そのかわいいチャコが今や化け猫へとバージョンアップ。身長はほぼレイと同じぐらい、体



重も40キロはあるだろう。

これから毎朝毎朝、こんな起こされ方したのでは、いつ自分がアッチの世界にいつてしまうかわかったもんじゃない。

「チャ、チャコ……気持ち嬉しいけど、ちょっとムリだから。声だけにして。あんたデカくなりすぎだから……」

「うーん……わかった、そうする」ちょっと残念そうな表情を浮かべ、チャコは頷いた。

レイは眠たい目をこすりながら、まだ本調子ではない寝起きの意識を目の前のチャコに合わせているうちに、ふとした疑問が浮かんだ。

「そういえばさあー、チャコって幽霊なの、妖怪なの？ 朝っぱらから出て来てるって結構普通だったりするわけ？」

「うーん、何なんだろうね。自分でもよく解らないけど、妖怪って感じじゃないと思う。こんな身体してるから、ただの猫の幽霊ってわけでもなさそうだけどね。ただ、レイと話してみたなあ〜とか、同じ人間同士みたいに遊びたいなあ〜とか考えてたから、こんな格好になっただけかも」

「ふーん、不思議なもんだね。自分の願望とかに合わせて姿が変わるのかな……じゃあ結構妖怪とかも——オレ、怖くなりてえ——みたいに思ってるヤツが、すごい怖い姿になってこつちに来てたりしてるのかな？」

「あはは、案外そうかもね、あたしは出くわしたことはないけど」

すでにアッチの世界の住人であるチャコにもわからないことがいっぱいあるみたいだ。

——これからもいろいろ不思議なことを体験できそう——

レイは、そう考えるとワクワクしてきた。

——でも、怖いのはやっぱりカンベンして欲しいな。 ちょっとゾクゾクするくらいなら

OK だけだね——。

朝一のボディープレスから雑談に入り、レイがふと、時計を見るともう朝の9時過ぎ。

——そろそろ、朝ご飯の用意でもするか——。そう考えたとき、ふとした疑問が浮かんだ。

——あれ、チャコの分どうしょ？——。

「ねえ、チャコって朝ご飯食べるの？」

「別に無くてもいいよぉ〜あつたら食べるけど、ずっと食べなくてもお腹減らないし」

「ふくんそうなの？ でもせっかく久しぶりに会ったんだから、今日は特別にチャコの大好きだったカツオブシご飯作ってあげようか？ オマケにちりめんじゃこも付けるよ」

さつきまで、普通の猫っぽくだるそうに毛づくろいしてたチャコが跳ね起き、背筋と尻尾をピンと延ばし前のめりになりながら、左右の色違いの眼をキラキラ輝かせた。

「食べる、食べるー」

化け猫になったとはいえ、こういうしぐさや反応は以前のチャコのままで。レイは懐かしさ

を感じると同時に少しほっとした。

「じゃあ、ちょっと用意してくるから待っていて」

レイは台所へ移動して、食器棚の中から以前チャコが使っていたエサいれ用の器を取り出した。それは少々重みのある金属製で、長期間使っていたせいか表面のメッキには細かい傷がたくさんついており買った時のような輝きは失われていた。昔は毎日の日課としてこの器にカリカリ、おやつのお魚ジャーキー、そして今から用意しようとしているカツオブシごはんをよそってやったものだ。

レイは保温状態になっている電子ジャーのフタを開けた、昨夜の残りのご飯は少々水分が抜け、輝きを失ってはいるものの温かそうな湯気が立ち上り、十分おいしそうだった。

チャコの器にごはんをよそい、カツオブシをパラパラとまぶし、冷蔵庫にしまつてあったちりめんじゃこを以前よりサーブಿಸしてたっぷり掛けてやった。

そして、自分の茶碗を取り出し、同じようにご飯をよそった。それらのとびきり簡素な品々と食器棚の引き出しにあったレイの大好きな明太子ふりかけを、丸い黒のトレイに載せ部屋に向かった。

ドアの向こうで眼をキラキラさせてそわそわしながら待っているチャコの姿が容易に目に浮かぶ。

レイはトレイを左の腕にのせ、この御馳走たちを落とさないよう、右腕で慎重にドアを開け

た。

「おまたせー……あー……っ！」

レイが台所で腕をふるっている間に、レイの部屋の床一面が銀世界に変貌していた、いや、散乱するティッシュペーパーで埋め尽くされていた。

「あ……ご、ごめん。ついで」

レイの叫び声に固まっていたチャコが恐る恐る口を開いた

ティッシュペーパーを箱から全部出して散らかしてしまいうケセは、化け猫になったあともそのままだったようだ。

以前ならここで大声を張り上げて叱り倒すところのだが、再会したチャコとの最初の食事の時間を台無しにしたくない思いから、レイは冷静に怒りを鎮めた。そして、今すぐ掃除する気はさらさらなかったので、満面の引きつった作り笑顔でこう言った。

「と……とりあえず先に食べよっか」

——あたしもオトナになったなあ——。

「いただきます」

真つ白に広がるティッシュの海で食事を始めた二人というか、一人と一匹。

そこでレイは、ある異変に気づいた。チャコのカツオブシごはんが全く減らないのである。確かにチャコは金属製の食器に鼻先を突っ込んでおいしそうにがつついているというのに。

「ねえ〜チャコ、ご飯全然減ってないんだけど、本当に食べられてるの？」

「はべれるよ〜(食べてるよ〜)」

チャコは口の中に入っているであろうご飯を飲み込んで、もう一度同じ言葉を繰り返して説明した。

「食べてるよ〜、味もちゃんとわかるし満足感もあるよ。でも、ご飯自体は減らないんだよ。仏壇とかお墓にあるお供え物って減らないだろ、それとおんなじ」

適当な説明を終え、チャコは再びカツオブシごはんを夢中で食べ始めたというか食べる動作を始めた。

「ふ〜ん、なるほどねえ」チャコの適当な説明で一応納得したレイは自分のふりかけごはんを食べ続けた。

——減らないってことは、どれだけ食べても太らないのかな？それ便利でいいな——。

それなりにお腹の虫も収まったところで、この真つ白に広がるティッシュの海を片付けることにした。とりあえず、一カ所にティッシュをまとめ重ねて、元々入っていたティッシュの箱にねじ込んだ。これで一応再利用できるだろう。

一面の白い海から解放され、一息ついたあとレイが口を開いた。

「ねえ、ところでバンドどうすんの？ 今日学校休みだから、ゆっくり相談出来るよ」

「あ、ごめん忘れてた」

いい加減さが実に猫っぽい。

「そうだね。まずメンバー探ししないとね。その前にとりあえず、自分達のパート決めようよ。レイはボーカルやりたいんだよね？」

チャコはコックリさんの時のレイの質問を覚えてくれたようだ。ということでもボーカルはレイに決定。チャコも異論無し。

次に、チャコのパートを検討し始めたところ、ドラムについては動いている物を見ると遊んでしまう猫の習性からして、シンバルが揺れているのを見たらまともに演奏に集中出来ないであろうということでも却下。ギターは弦の数が多いのでちょっと不安なようだ。キーボードは鍵盤をみると、どうしても「ネコ踏んじやった」のイメージが湧くのでムカツクということだ。

……で、結局消去法でベースに決定。

——こんな適当でいいのか？——

二人のパートが決定した所で次は他のメンバー探した。必要なのは最低2人ギターとドラム。でも、表現の幅を広げるにはやっぱり、キーボードも欲しいところ……。

しかし、ベースリストが化け猫という尋常ではないバンドだけに、普通の人間を誘うのはかなり無理がある。いちいち説明するのも面倒くさいし、レイがヘンなことというヤツとウワサをたてられるのもカンベンしてほしいので、チャコの勧めで幽霊をメンバーにすることになった。

すでに化け猫がメンバーという時点でもう常識というものを軽く超越しているので、レイもあきらめて、かなりガクブルだけど無理矢理納得した。

そしてレイはチャコと共にメンバー探しのために街へ出かけてみることにした。

そしてこの日、レイはいわゆる「草葉の陰」と呼ばれている世界を初めて体験することとなる。チャコの適当な説明によると、一般的に生きている人間が「あっちの世界」と呼んでいる世界とレイたち生きている人間がいる「こっちの世界」の間には、どうやらワンクッションあるらしい。

そして、その「あっちの世界」と「こっちの世界」の間にあるのが一般的に呼ばれている「草葉の陰」という所のように、それは生きている人間の目に見えてないだけで、同じように身の回りに存在しているらしい。

普通は死んでから49日たったなら、あっちの世界に行かないといけないのだけど、こっちに未練がある人や、何となく行きたくなくて拒否している人が留まるところが「草葉の陰」っていうところらしい。しかし、その「草葉の陰」の世界が見えないとメンバー探しも始まらない。

「ねえチャコ、アタシ霊感とか全然ないんだけどどうすりゃいいの？」

「ああーそうだった、忘れてた」

そう言いながらチャコはポケットの中からくしゃくしゃになった一枚の紙を取り出した。き

ちんと折り畳んでからポケットに直すということは出来ないらしい。

「草葉の陰の世界が見られるようにするのは許認可制でね、今朝事務局にレイのこと申請したの。……で無事許可が下りて貰ったのがこの御札。これを頭のとっぺんにのっけると見えるようになるよ」

チャコはそういいながら何やら怪しい文字だか記号だかわからないモノが書かれた御札をレイの頭に載せようとしたとき、ふとその手を止めた。

「あーそうだ、裏に注意書きがあった。読むから聞いてね。……えっと、この御札は使用上の注意を良く読んでお使いください。……1、この御札を頭頂部におくと一瞬で燃え尽き、その瞬間から草葉の陰の世界が見られるようになります。燃え尽きる時に青い炎が出ますが熱さは感じませんので、ご安心ください。しかし、使用後頭頂部にかゆみや湿疹その他何らかの症状が現れた場合は、すみやかに医師に相談し、指示に従うようにしてください。……2、この御札を使用し草葉の陰の世界が見られるようになったあと、もう以前の状態には戻れませんが、（一生見える状態が持続されます）よって精神衛生上不安のある方はご使用を御控えください。なお、使用後何らかのトラブルが発生したり、精神上の病などを発症することがあっても当方は——」

「もういいよ、やっちゃって」

長々とした説明に耳を傾けるのは苦手だ。

元々オカルト好きなレイからすれば、怖いとか、覚悟とかよりも好奇心のほうが遥かに勝っていたので、ためらいは殆どなかった。

——見知らぬ幽霊と直で話すのはちょっと怖いけど……なんとかなるさ。——

「せっかちなあ、まあいいや、じゃ、置くよ、目閉じてて」

そう言ってチャコは静かに御札をレイの頭の上に置いた。目を閉じているまぶたの向こうが一瞬明るくなったのを感じた。確かに注意書き通り熱さは感じなかった。

——どうなるんだろ。いつも見慣れた街が信じられない光景になるのでは？——
たった今から目の前に広がる光景を想像してレイの鼓動が早まった。

「いいよ、静かに目を開けてみて」

チャコの言葉に従ってゆっくりと目をあけてみた。

しかし、目の前に広がった景色は想像とは裏腹に、行き交う人の人数が2割ぐらい増えただけって感じだった。正直拍子抜けである。しかし、二度と見たくない恐ろしい世界が広がっているよりはずっといい。

街を歩き交う人々を眺めていると、その中に今まで見てきた人間とは明らかに違う雰囲気の人たちがいた。何十年も前に流行ったと思われる格好の人や、ちょんまげの人、侍、甲冑を着た武士、兵隊、歴史の教科書に出てきそうな人が普通に歩いている。

あまりにも自然体なので怖さを感じさせなかったのが以外だった。さしずめ映画のロケ現場



の休憩時間か、コスプレ趣味な人が多いなど感じる程度だった。

でも、見かけとかそんなのは差し置いて決定的にこっちの世界の住人と違うところは、みんなちよつとだけ地面から浮いていること、そうほんの数センチくらい・・・そして影が無いという点だ。そのあたりは良くマンガとかで見のお化けの設定と同じだ。

「これで、見えたね。話も出来るけど、こっちの世界の人間には一人で喋っているように見えるから、ちよつとヘンに見えるかもね。」

「……ちよつと待って、あんたも幽霊みたいなモノだから……つまり、ココに来るまで、アタシは周りの人から一人で会話しながら歩いているヘンなコッて思われてた訳？」

「ま、まあ……そ、そういうことになるね」

「早く言え！ バカ！」

どおりですれ違う人たちの様子がかかわり合いたくない感全開だった訳だ。

知り合いに見られてなかったことをただただ祈るレイ。

新しい世界を垣間みたレイと化け猫チャコは無事にメンバーを見つけることができるか？